

弱い「内面」の陥穽

—『長崎の鐘』の受容に即して—

篠崎 美生子

いかに権威ある存在であっても、人は必ず弱く醜い「内面」を持っているとの認識の下に、あらゆる「内面」を暴くことを使命として日本の近代小説はスタートした。しかし日本近代文学は、この100年あまりの歴史において、弱い「内面」をテコに権威を転倒させる方向には向かわず、かえって権力者の弱い「内面」に同情し慮る習慣を蔓延させてしまった。丸山真男も示唆するように、日本社会には、権力の同心円の外から内に向かって忬度のベクトルを走らせ、内から外に向かっては疎外—その人の「内面」を無視し人として扱わない—する構造が存在するが、それは、近代文学がもたらした思考習慣なのかもしれない。

この同心円上の忬度と疎外の様相が最も顕著に見出せるのは、原爆の語りである。原爆文学の多くがクローズアップするのは生き残った被爆者の負い目の感情だが、その負い目の感情は、権力の同心円の外から内に向かって濃く、内から外に向かって薄くなっている。例えば、生き残った「娘」がその負い目と病に苦しむという原爆文学にありがちな話型は、「娘」というものが、一家の中でも社会の中でも同心円のより外側に位置付けられていることを証明しているだろう。

一方で原爆の語りは、本来原爆投下についての責任を負うべき存在を免罪した。その最たるものは、永井隆『長崎の鐘』（1949）だ。このテキストは、原爆が長崎の中心部から逸れて「浦上」に投下されたのは「神の摂理」であるとした上で、神は浦上のクリスチャンたちの死を「平和を迎える為」の「適当な犠牲」とみなして「人類の詫びをきき、忽ち天皇陛下に天啓を垂れ、終戦の聖断を下させ給うた」と語るのである。

この言説ののちに「浦上燔祭説」（高橋真司）と名付けられ、天皇とアメリカを免罪するものとして、その政治的な問題が取りざたされた。ただ、その批判は、かえってこの言説の宗教上の正統性を担保してしまったきらいがある。神が果たして人間に、命を「犠牲」にして「詫び」ることを要求する存在であるかについては、異論があるにもかかわらずである。

仮にその点を措くとしても、浦上のクリスチャンだけを「犠牲としてふさわし」いものとし、その前に「全滅した都市」は「犠牲としてふさわしくなかった」とするこのテキストの選良意識は、隣人愛を説くキリスト教の言説としてふさわしくない。

なぜ、『長崎の鐘』の語りにおいてはこうした「浦上」選良意識が成立し、またその後もほとんど批判をうけることなく今日に至ったのか。そのわけはおそらく、長崎の原爆が「浦上五番崩れ」とも呼ばれることにあるだろう。つまり、永井やその周辺のカトリックの語り手によって、過去の宗教弾圧の連続性の上に原爆がイメージされている点に鍵があるということである。

「崩れ」とは禁教下でクリスチャンであることが露見して迫害を受けることを意味し、この意味での浦上の「崩れ」は、一番（1790）から四番（1867～）までであった。尤も、近年の潜伏クリスチャンに関する研究によれば、一般に想像されるような大虐殺は、すくなくとも一番崩れから三番崩れまでは行われていないという。年貢を納める百姓の殺害は武士階級にとっても得策ではなかったからだ。唯一、幕末の四番崩れでは、3000人以上のクリスチャンが自らの宗教的アイデンティティ

を主張した結果、大規模な弾圧が発生した。したがって、三番崩れまでと四番崩れでは、その性格が大きく異なるのである。ところが、『長崎の鐘』では、一番から四番までの崩れが、「信仰の自由なき日本に於て迫害の下四百年殉教にまみれつつ信仰を守り通し」た歴史へと一本化されその延長線上の試練として原爆が語られているのである。

永井によるこうした伝統の創造に力を貸した人物として、浦上出身の司教、浦川和二郎の名を挙げておきたい。彼は、「聖地浦上」のイメージを広める書物を大正期から繰り返し執筆しているのだが、注目したいのは、そこで語られる殉教者の姿が、書かれるたびに一層立派な信者へと変貌している点である。例えば1600年代に処刑された親子三人ジワソノ、ジワソナ、ミゲルは、『日本公教会の復活（前編）』（1915）では「幾ら欺しても騙しても棄教」せず「火刑」に処せられたとのみ語られるが、『切支丹の復活 前編』（1927）での彼らは、自分たちを捕えにきた役人たちにことさら「新米の飯」や「自作の草鞋」をふるまう健気な信者へと粉飾されている。

このような聖なる3人の姿は『浦上切支丹史』（1943）にも受け継がれる。しかもこの書物には、「皇国への感謝」まで書き加えられている。明治憲法の下で信教の自由が認められたこと、日本帝国に実力があるからこそアジアの他国に先んじて日本に大教区が設けられたことに感謝し、国への忠誠心を持たねばと、浦川は呼びかけるのである。

浦川の言説において、過去の「崩れ」の過酷さを語ることが、現体制の肯定に直結していることがここから理解できる。1943年とえば、実際にはキリスト教の信仰が激しく弾圧された時期であるにもかかわらず、浦川は、長い弾圧に耐えた浦上に日本帝国が信仰の自由をくれたことを寿いでいるのだ。

この言説の構造は、『長崎の鐘』と相似形である。『長崎の鐘』は、“原爆、すなわち「五番崩れ」を浦上のキリシタンが耐え忍んだ結果、世界平和と信仰の自由がもたらされた”と語るテキストなのだ。1943年の段階で日本帝国が信仰の自由を保障したという言説と、原爆によって自由がもたらされたとする言説は矛盾しているのだが、そこに、浦川、永井も、社会も向き合おうとしなかった。それは、そのどちらもが、現状の肯定から逆算された「物語」であるからだ。そう考えると、『長崎の鐘』の最終章が原子力の平和利用を礼賛する内容になっているわけも理解できる。

権力の同心円の最も周縁に置かれることが多かったであろう戦前のキリスト者。高学歴でありながら、宗教的理由から同心円の周縁に置かれた彼らが、正当に報われ、少しでも中心に近づき寄り添いたいという欲望を抱き続けた可能性は十分にあるし、また理解もできる。しかし、その欲望に従って体制に寄り添う語りを繰り返し、現状にとって意味ある死を聖別するならば、それは靖国のシステムの再生産に過ぎない。

日本の近代文学は、権威、権力者の弱い「内面」を許し、慮る習慣を社会にもたらした。しかし一方で、文学のはらむ狂気は、ときに現状肯定の「物語」を解体する力を持つことがある。カノンを批判的に読むという行為こそが、その力を引き出すはずである。